いまでも、あの日のことを夢に見る日がある。

いつもキラキラと光る瞳が、真っ暗な闇を湛えている姿が、痛々しくて、苦しくて。思わず声をかけてしまったのだ。

熱されたフライパンに乗せられたベーコンの油の上で、卵の端が小さく跳ねていた。時刻は7時40分。いつもならそろそろ階段を下る足音が聞こえてくるが、いくら待っても足音が聞こえない。

俺は小さく溜息をついて火を止めた。二階に上がって一番手前の部屋の前で足を止める。一応ノックはするが返事はなく、俺は小さく溜息をついてから部屋に入った。

「優一、早く起きないと学校に遅れるよ？」

「……うー、ん」

星の絵柄の布団の真ん中がこんもりと盛り上がっており、その中からくぐもった声が聞こえごそごそと動いたあと、その動きがすぐに止まった。

……全く。

「すーぐーるー?　起きろー?」

　そう言ってバサッと布団を剥ぎ取ってやると、声の主は布団の真ん中に小さく縮こまっていた。

　同年代に比べるとやや白いが健康的なつやつやの肌。こげ茶色の頭髪はあっちこっち跳ねがついて、朝の支度に余計に時間がかかりそうだと俺は心の中で頭を抱える。そんな俺の思いに気付いていない様子で、小さな指先でくっきりとした二重まぶたに縁取られた瞳を眠たそうにこすっている。

「まだねむい……」

　緩慢な動きでベッドから起き上がる優に「早く下りて来いよ」といって俺は階段を降りて、キッチンへと向かう。優を起こしに行く前にセットしていたトーストがちょうど焼きあがっている。

「おはよう、優」

「んー、おはよ……。きょうちゃん」

　優は俺の子供じゃない。

　十数年前、俺には突然、十歳年の離れた兄ができた。父親が若くで夫を亡くした女性と再婚し、その連れ子が兄だった。歳が離れているおかげか、元々弟が欲しかったらしい兄にはとても可愛がってもらえた。俺は兄が大好きだった。

　俺と兄が成人して、実家を出たと同時に俺たちの両親は田舎に引っ越した。そして数年後、兄は大学のときから付き合っていた彼女と結婚した。結婚式で父親が血のつながった親子のように、兄と泣きながら抱き合っていたことは今でもはっきりと覚えている。その半年後、義姉が妊娠した。二人の間に生まれた子供、それが優だ。

「今日は体育の日だろ？　体操服袋は用意してる？」

「うん、ちゃんと準備したよ」

　もごもごと小さな口を動かして、優はバターの塗られたトーストをゆっくりと咀嚼しているところだ。ちらりと壁掛け時計に目をやる。このままのペースで食べていては学校に遅刻してしまう。早く食べるようにと促して、自分の食べ終わった朝食の皿をシンクにもって移動した。

　銀色の蛇口をひねるとざぁっと水が流れ出す。朝の水は酷く冷たく、まるであの日の雨を思い出す。

　その日は真夏に突如振り出した雨のせいでひどく蒸し暑く、真っ黒なスーツの中にじんわりと汗が伝っていた。八月上旬、兄夫婦は死んだ。夏休み期間で、普段運転をしない大学生が起こした交通事故に巻き込まれたのだ。優もその場にいたが、奇跡的に命に別状はなかった。

　両親を突如失った子供を誰が引き取るかといった話になった時、俺が引き取ることに決めたのだ。俺たちの両親ももう歳で幼子を育てる体力はないし、義理の姉の両親は大病を患っており、優を育てる余力がなかったのだ。

　でも俺は、そんな話にならなくたって自分が引き取ると申し出ていたと思う。いつも温かだった指先が、あんなに冷たく凍えているのをもう見たくなかったから。

「……ちゃ、ん。きょうちゃん！」

　はっと顔を上げると、使用済みの皿をもって立っている優の姿があった。

「ごちそうさまでした」

「うん、どういたしまして」

　皿を受けとったときに触れた指先がほんのりと温かくて、じんっと胸が揺れた。

　玄関先まで優を見送って、俺は自分の個室兼仕事部屋に籠った。

　思い切ってテレワークを選択出来る会社に転職して正解だった。都会の満員電車に嫌気がさしていたし、優を引き取るに至って在宅に居たほうが都合がいい、そう考えて今の仕事へ転職した。通勤のストレスから解放されたのは大きかった。今ではこの仕事が天職なんではないかと思えるほどだ。

　溜まっていた仕事を片付けているとあっという間に時間が過ぎていて、気付けばもう午後だ。在宅ワークの昼ご飯はいつも簡単に卵かけごはんで済ませたが、今日は昨日の残り物の煮物も一緒に昼ご飯に食べたからか、心地よい眠気が手招きしている。キリの良いところまで、と思っていてもなかなか眠気には打ち勝てそうにもない。と、その時だった。

　ピンポーン。

　眠気を覚ますかのように大きな音が耳に届く。そういえば宅配便が届く予定だった。

　俺は、つま先にひっかけたままのスリッパを慌てて履きなおして玄関へと向かった。届いたのは某有名通販サイトで注文していた荷物だった。それの中身を配送業者が知るわけがないのに、俺の内心はドキドキしっぱなしだ。気取られないようにいつも以上に丁寧にお礼を言って、俺は自分の部屋へと戻った。

　デスクからカッターナイフを取り出して、高鳴る胸を抑えながら段ボールを丁寧に開封していく。箱を開くとパッと見ただけでは中身が分からないように商品は緩衝材に包まれ

ていた。まるで宝物を見つけるときのように緩衝材を丁寧によけていくと、その中心にお目当ての商品が顔を出した。

「はぁ……、やっと届いた……！」

　中から出てきたのは黒地にデカデカと赤字で書かれた「あの幻の名器！　失神必須！！」の文字。箱の中央は透明のフィルムが張られており、ショッキングピンク色の極太ディルドが顔を覗かせていた。それは、ゲイビデオで竿役を多く務める男優の性器を模したディルドだった。模したと言っても、ぐねぐねと激しく頭をもたげたり、バイブレーション機能がある時点でまた別物ではあるがそれはそれで楽しめるので気にしない事にした。

　そう、俺の性的対象は同性だ。どちらかと言えば入れるよりも入れられる方。いわゆるネコというやつだ。優を預かるより以前はマッチングアプリやゲイバーなどで行きずりの相手を見つけて一晩を共にするなどただれた生活を続けていたが、今ではすっかりおとなしくなっていた。しかし、俺もまだ30手前。性欲を手放すにはまだ早く、ときどき自分で処理をするための道具を通販しては己の欲を発散していたのだ。

　時刻は15時少し前。今日の分の仕事はあらかた終わっているし、優は学校が終わった後そのまま友達の家でゲームをしに行くと言っていた。今のうちならば誰にも邪魔されず楽しむことが出来る。

　俺は上機嫌で準備をして、デスクトップパソコンの前に腰を下ろした。仕事用チェアが汚れないように念のためにバスタオルを引いて、ヘッドホンを装着する。音漏れ防止機能が付いた優れもので、臨場感たっぷりに映像と音声を楽しめるのだ。

　いつもお世話になっているサイトを開き、お気に入りの男優の動画を探した。俺のお気に

入りはこの某ディルドの元になった男優だ。男らしく引き締まった肉体と健康的に日焼けした肌。笑うと両頬にできるえくぼが愛らしい。

　俺もこんな上司に抱かれてみたいなぁ……。

　今回オカズにしたのは推し男優が上司で、ちょっと手のかかる部下に対して指導と称してエロい事をする、というある意味定番のシュチュエーションだ。上司の命令通り、部下が恥ずかしながらも服を脱ぐシーンで部下を自分に重ね、下着を下ろす。本当は動画通りに全裸になって楽しみたいところだが、万が一に備えて脱ぐのは下半身だけだ。

『ほら、詫びる気があるなら、やるべきことは分かっているだろう？』

　その言葉に対して部下はこくりと頷き、跪いて上司のベルトに手をかけた。カチャカチャっと小さな金属音を立ててあっという間にズボンのホックを外していく、嫌がってるなら、もっと手が震えるとかそんな演技をしてほしいが今は深く考えないでおく。パンツの上からでも分かるほどの大きな怒張が眼前に突き出される。画面越しでも分かるほどのオス臭さにゴクリと喉が鳴る。

『ぁ……！』

　まるで壊れ物を扱うように指先を絡め、下着越しに上司の陰茎を柔らかく噛んだ。玉をころころと転がしつつ、竿の部分にねっとりと舌に含む。ときおり、じゅっ、じゅっと嫌らしい音を立てて誘惑する姿に、自身の熱がぐっと高まっていくのを感じた。

　たまらない。といった様子でなめ続ける部下の頭を無理矢理に引き剥がすと唾液がつっと陰茎と舌先をつないだ。

　ぐっと下ろされた下着から怒張した陰茎が部下の頬をぺちんとはたいた。下腹にくっつ

くほどそそり立ったそれはもはや凶器と言っても過言ではない。ドクドクと脈拍が聞こえてくるほどに隆起した血管が陰茎を包み、はち切れんばかりに膨らんだ陰嚢、よく使い古されたであろう赤黒い亀頭が姿を表し、気づけば画面の中の部下と同様に感嘆の溜息を吐いていた。

「は……、すごっ……！」

動画と同様にディルドを自身の眼前に掲げる。蒸れた男の匂いが鼻の奥をかすめたような気がして、さらに興奮を駆り立てていく。俺は大きく口を開いて、ディルドを咥え込んだ。口いっぱいに感じる圧迫感に高ぶりを感じながら、口内をぐちゃぐちゃに犯していく。相手に無茶苦茶に喉奥を攻められるのも好きだが、自分の好きなところを好きに攻めることができるこの行為も俺は大好きだ。

口蓋を刺激するたびにやや穏やかな快楽が広がっていく。もっと、もっとと求めるうちに自然と片手は自身の胸元に伸びていた。動画内ではただ相手の陰茎を舐めあげているだけだが、どうしても我慢ならず指先は自身の乳頭を摘まんでいた。女のようにぷっくりと赤く熟れたそれは、乳輪によって隠れてしまっている。昔は男らしくないこの陥没乳頭が恥ずかしく、銭湯や修学旅行の時には誰にも見られないようにさっさと体を洗って、風呂から出て行っていた。しかし、成人してからこの身体のコンプレックスは案外需要があることを知った。それからは自分の身体のチャームポイントの一つであると自負している。

乳輪に隠れた乳頭を無理矢理摘まんで、くりくりと摘まみあげるとゆっくりと乳頭が顔を出してくる。これをカリカリと指の先で掻いてやるだけで自然と腰が揺れた。

あ、乳首っ、きもちぃ……♡♡

じゅぶじゅぶと口腔内を蹂躙する怒張を引き抜き眼前に晒す。てらてらと唾液で輝くさまがまるで、我慢汁がたっぷりとあふれているように見えて脳がどんどん溶けていくような感覚に陥る。

はっ、はっ、と短く呼吸を整えながら、摘まんでいるのと反対の側の乳頭にディルドを押し当てる。亀頭のあたりが陥没した乳頭を押しつぶし「あぁっ、あっ……！」と情けない声が抑えられなくなる。

やばい、やばい……！　乳首、壊れる……ぅ！

ガクガクと腰が揺れて我慢汁があふれてくるのが分かる。

「はぁ……っ、あ゛ぁッッ！」

無意識に腰が弓なりに伸び上がって、足先がぐっと持ち上がった。一瞬だけ思考がホワイトアウトして、満ち足りた多幸感に脳が支配される。眼球が上を向いているから、自分の下半身は見えないままだがおそらく白濁とした体液が陰茎を伝っているのだろう。どろっとした暖かさが太腿を伝った。

射精後の気怠さに抗いつつ、近くにあったティッシュボックスから紙を引き抜いて、体液を拭う。一度、精を吐き出した後だというのに自身の陰茎は依然、熱を抱えたままで触れられていない後孔がぐっとうずく。

動画は丁度場面が変わり、今度は上司に向けて部下が自分の尻を差し出しているところだった。尻たぶを左右に押し広げてヒクつく後ろが丸見えだ。